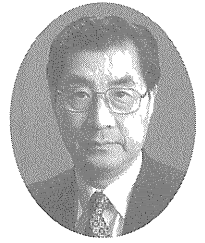


ずいそう

酔いに耐えて

宮本 登



酒ではなく乗り物に酔った話である。それは辛くて苦しい。人に言えば、酔い止めの薬を飲めと薦められ、時には乗り物酔いで死んだ人はいないと慰められた。薬も種々試したが、相変わらず酔うことが多かった。酔いは、体の平衡状態を感知する内耳の三半規管が慣れぬ動揺に対し敏感に反応することに起因すると言われる。素人考えでその規管を動揺に慣らしてはと思い、縄跳び、ブランコ等も試した。どれも良くは効かなかった。

酔う時は、殆どの場合決まった前兆がある。何かが臭い始めるのである。臭いに敏感になり始めると言った方が良いかも知れない。今でも幾つかの記憶が鮮明に蘇ってくる。小学生の頃、蒸気機関車が引く列車で1時間足らずの旅にもよく酔っていた。煙の臭いを感じ始めるのである。それは特に冬季に、また夏季は雨の日に酷い。デッキに立ってじっと耐えていた。

20歳前後、汽車と自動車に酔った記憶は殆どないが、船にはよく酔っていた。特に青函連絡船での苦しい思いは忘れることが出来ない。揺れを感じると同時にペンキらしき臭いが異常に鼻につき始めるのである。

30歳近くになって、妻と二人で東京へ行く機会があった。共に連絡船での酔いが心配だった。船内では臭いを感じる前に、出来れば船の出航前に寝てしまおうと考えていた。札幌からの列車が函館駅に近づくと早々にデッキに立ち、列車が停まりドアが開くと弾き出されるようにホームへ出て人の群れと一緒に連絡船へ向かって長い栈橋を走った。皆、良い席を取りたいようだった。船室の一角にあったマット敷きの上りに陣取り、運良く数少ない枕を手にして横になった。周りにはたちまち人で一杯になり、皆楽しそうに話をしたり食べ物を口にしたりして出航前の船室は和んでいた。そんな中で早々と横になった私達は奇異に映ったかも知れない。人々のざわめきを聞きながら何時しか寝込んでしまった。

目が覚めた時、船は上下に大きく揺れていた。出航後1時間位は経っていたであろうか、船は湾を離れて波高い津軽海峡の真っ只中に出ていた。船室のざわめきも消え、それまで起きていた周りの人達は酔いを感じてか次々と横になり始めていた。その揺れの中、二人共に不思議と気持ちが悪くならなかった。喉の渇きを感じ、事もあろうに大きな揺れの中で飲み物を美味しく飲んだ。珍しく酔わなかったのである。医学的な理由は分からないが、それを契機に船にも何となく強くなったように思う。東京の学会で数日過ごし、函館へ向かう帰りの連絡船でも酔う気配はなく、船内で確かハイジャックに遭遇したよど号が戻って来たのをテレビで見っていた。古い話である。

その後、汽車と船に代わって飛行機を利用する機会も増えた。国内便でも時たま酔っていたが徐々に強くなって、このところ余程揺られない限り長時間の国際線ですえ殆ど酔わない。

考えてみると、酔いは歳と共に解消されて行くと言う極めて単純なことが、私の酔い歴の根底にある摂理のように思えてならない。若い頃は酔いを解消するために思いを巡らしたし、幸運にも酔わなければその経験を明日への保障にしたいと一喜一憂もしたが、それらは全て、お釈迦様の意向に目もくれず自在に飛び回った積もりの孫悟空のようであって、所詮お釈迦様の掌と言うべき厳然たる摂理の中だけで飛び回った行為のようにも思える。

酔いには随分苦しめられただけに、昨今、酔い癖の消滅に安堵と喜びを感じている。しかし、これはわが身に忍び寄る感受性の低下によるのかも知れないし、また感激や夢にも酔えなくなる前兆のようにも思われて単純に喜べない心境である。辛い時期を経て成熟を果たした世上にも似て。

—みやもと のぼる 北海道大学大学院工学研究科教授—